

## 【三遠南信災害ボランティア交流学集会】(第3回)レポート

日時：平成20年7月5日 13～17時 会場：浜松まちづくりセンター

主催：浜松市社会福祉協議会 共催：浜松まちづくりセンター 後援：都市防災研究所（東京都）

記録：富田（浜松社協 東地区事務所） 校正：野本（Qポラちくおんき）

# 地域を越えた連携と備え

7月5日(土) いつ起きてもおかしくない「東海・東南海地震」の発生に備え、三遠南信(名古屋、豊橋、豊川、飯田、湖西、浜松)地域のボランティアによる相互の交流学習会へ参加し、報告レポートを作成しましたのでご覧ください。

主催者あいさつ 浜松市社会福祉協議会 市川登喜男事務局長

浜松市は、12市町村が合併し全国で2番目に大きい。災害が起これば、社協は災害ボランティアセンターを立ち上げなければいけないが、広域、多種多様な被災状況を想定すると体制が十分ではない。ぜひ、皆さまにサポートしていただきたい。

静岡県は、自治会(自主防災会)・市などで防災訓練等を長年実施しているが、災害ボランティアの力添えも必要であるとする。

また、有事の際だけではなく日常のネットワークが大事であり、お互いに情報を共有、良いところを学び、吸収する場にしていきたい。

## 交流学集会 「日頃の活動“ネタ”紹介」・・・各地域での活動発表

### 豊橋市

発表者：豊橋防災ボランティアコーディネーターの会

私たちの団体は、愛知県と豊橋市の災害ボランティアコーディネーター(VC)養成講座修了生で組織されている。現在、会員は130名ほど。

今年から社協と連携して災害Vの支援をしていくという新しい体制になった。

子供向けの紙芝居、阪神大震災を教訓に東海地震に備え、リサイクルでさまざまなものをつくり、地域に招かれ啓発活動を展開している。

### 大型紙芝居

「稲村の火」 150年前江戸時代400人ほどの和歌山県海辺の村のお話。

「岩屋観音のお告げ」

2年前の豊橋100周年記念で作成。

宝永4年に白須賀(湖西市：現在より海側)が津波に襲われた時の話。

参勤交代の際に、白須賀宿場に寄った岡山のお殿様は、夢の中で岩屋観音から津波が来るとお告を受け、それを信じ急いで二川宿場(豊橋市)へ向かう。

夢は本当で大勢の人間が津波に襲われた。

この感謝の気持ちで灯籠を豊橋に奉納したというお話。



地震が起きたらどんなことが起きるのか。

道路がずたずたなど。津波も怖い。

スマトラでも25万人が犠牲になった。

紙芝居により津波の恐ろしさ、逃れるには高台へ逃げることを伝えたい

今後は、被災者とボランティアの支援、減災啓発活動を取り組み、自主防災組織の推進と併せ地域と連携していきたい。

### 豊川市

発表者：豊川防災ボランティアコーディネーターの会

今日は4人が参加。豊川は人口161,712人。来年は小坂町と合併し18万人になる。

東名、鉄道(名鉄・JR)、国道1号線な

## 【三遠南信災害ボランティア交流学集会】レポート

ど多くの公共交通機関が通っている。北部に山が多いが、平野部は液状化が想定され地震に弱い土地が多い。

会は平成15年に結成し12名が所属。目的はボランティアの養成、住民への防災啓発活動など。市より委託受け、4日間の日程内容で実施し、4年間計126名を養成。今後も講座の継続を求めていきたい。傷病者役をリアルに演技、傷病の具体例を説明しながら発災直後の混乱を想定したトリアージ研修を取り組む。

市民病院などの自主消防隊と訓練を同時に行う。今後は医師会と協力し研修や訓練を広める。

6月29日にはフォローアップ講座を実施し、炊き出し・災害ボランティア支援本部の立上げ等を行う。



### 飯田市

発表者：飯田市ボランティア協会

災害Vの取り組みについて飯田市は後発。社協の三遠南信交流会で災害ボランティア活動を知り、浜松や豊橋で勉強を重ねた。

当協会は、皆で支える福祉のまちづくりを中心に活動し30年、またNPOになって4年目。ふれあい広場やヘルパー養成講座は開催したが、災害ボランティアについては2000年から本格的に活動を始める。

飯伊地区は、13市町村、人口19万人、面積の85パーセントが山。

災害VC養成講座修了者の連絡協会を作り、行政に代わり出前講座、防災講演会(年50

~60回、8,000人)などを開催して減災意識を啓発している。

家具固定金具の取り付けが高齢者では難しいため、手助けをする取り組みを行い、消防団員や自治会福祉委員がボランティア活動に参加してくれるようになった。

浜松や豊橋から支援をあてにできないので、各地区の公民館を基点に少しずつ住民が自ら動き出した。安否確認は20分以内、実際に人を運ぶ訓練、要援護者及び支援者の登録推進。



災害訓練ではなく防災訓練を目指したい。

自治体と共に行うことが大事であり、被害マップづくりを行い、本部で対応策を検討。

上水道が止まったらどうしたら良いか、実際に確保方法を実践。

担架を実際に出し必要数の確認。

体験したことない人は実感が沸かないのでビデオ啓発を行う。

子供対象で灯りランプづくり、カレー調理体験を実施。楽しさから親も参加し、各家庭の防災につながる。

7月21日、昭和36年に発生した土砂災害を学び、現場を視察する学集会を開催。

ボランティアは沢山いるが、一般に福祉のイメージが強いため防災・減災・災害に関わることが理解されにくい。今後は、行政と双方方向の関係で連携したい。

### 浜松市

発表者：サイボコ浜松

浜松市は、人口80万人。静岡県の災害V

C講座修了者は、それぞれの地域でそれぞれに災害又は防災ボランティア活動に取り組んでいる。その中の一つを紹介。

#### 子どもをまもるワークプロジェクト

- ・子育てネットワークぴっぴ、浜松まちづくりセンター、社協、アクティブ、アトピーの会でワークブックをつくる。
- ・浜松地域は、昭和19年の東南海地震以降に地震災害の経験がないため、防災に無関心な親が多く、次世代の子供を守れない。
- ・ブックでは、まずは命を守ること、地域で連携することを目的に、色々な団体にアンケート調査を行う。なにが不安か、子供をどう守るかなど当事者の声を聞く。
- ・ブックの意図を伝え、体験学習のファシリテーター（促進者役）講座を開催。  
子供に着せる防災ベストの紹介、高齢者にも応用可能。

あなたは災害時子供を助けられますか。

地域とのつながり。助け合いができる関係を。スリッパを作り、足をまもることの大切さ。生活の知恵を活かす。

透明大型ごみ袋による合羽づくりは幅広い年代に講評。普段にも使えるなど気がほぐれる。いきのびる工夫。楽しみながら身の回りにあるもので備えられる。

「アレルギーと防災を考えるシンポジウム」体験をききながら連携を深める。

自閉症協会での防災訓練。災害時でも自宅で生活できる方法、対策を考える。

PTA、子ども会が主催するイベントに参加し防災・減災意識の啓発を行う。

災害の来ない今を大切に。

備えを忘れない、助け合いは日常の地域のつながり。また、要援護者は、地域に複数の理解者を持つことがポイント。

災害時には哺乳瓶の消毒ができないので、紙コップ式「のめるマグ」の哺乳瓶。これは、トレーニング用、アウトドアのために開発された製品。高齢者の介護にも応用が利く。

また、アンケート調査の疑問（ニーズ）を解決するための取り組み作業において、数多くの情報を集めることができた。



#### コメント（講評）

栗田暢之 レスキュースタッフ（名古屋市）

全て地域性がでていてすばらしい活動。今回名古屋からも来ているので機会があれば交流できたらと考える。

豊橋は、場数を踏んでおり堂々している。

また、地域に根付いて話題、活動内容。

豊川は、128人も仲間を養成し専門家集団になってきた。また市内の各関係者に影響を与えている。

飯田は名古屋に近く、昔からつながりがある。圏域が違くと防災体制も異なる。外で学び地域の活動に取り入れががんばっているが、関心を持つ住民を増やために地道であるが活動を継続してほしい。

浜松の活動は、「ゆめ風基金」が行っている障害者市民の助け合い活動に似ている。

当事者のアンケート結果がブックになったことは、私たちの声を聞いてほしいという要求に応えた結果。哺乳瓶の代用品として紙コップなどは主婦（女性）、暮らしの知恵がある。

ネタ紹介で、無駄なことは一つもない。

共通していたこと

自分達はなにができるか真摯に考える。

住民が主役、住民自身が頑張る。

地域が主体である。

各団体にそれぞれの知恵があつて。

宮城・岩手内陸地震の現地では

- ・宮城・岩手内陸地震では、Vセンター立上げを避けて、地域の助け合いセンター窓口を開設し細かな支援を行っている。

## 【三遠南信災害ボランティア交流学集会】レポート

- ・家に帰れない人、着の身着のままの避難所生活によるストレス。
- ・宮城県栗原市耕栄地区では、全壊1棟。半壊2棟。一時帰省の滞在が3時間では、身の回り品の持ち出しが精一杯。
- ・収入源である「いわな養殖池」が心配。イチゴ農家では収穫時期であり死活問題。生業支援、生計を立て直すのはむずかしい。
- ・栗原市は10町が合併。広域過ぎて情報が繋がらない。市社協も支所間の機能・連携ができていない。平時から旧市町村で連携できるつながりを作らなければならない。復興支援を考える
- ・新潟中越地震の山古志村では、牛をどうにかしなければの要望に、自衛隊のヘリコプターによる空輸が実施し復興支援が実現。災害時こそ、住民同志が団結していかなければいけない。
- ・生業が成り立つような仕掛けや支援を考えなければいけない。



### 連携協力の強化

- ・岩手県と宮城県の県行政域を越えた連携ができていない、難しいのが現実である。
- ・東海地震では、山間地において2,000以上の孤立集落が想定すると、県境を越えた助け合いが必要となる。
- ・今回の三遠南信交流学集会は、県域を越えたネットワークでありすばらしい。

## 交流学集会 「クロスロードゲーム」・・・進行役：湖西市災害V 前田展雄

### 「クロスロードゲーム」とは

「クロスロードゲーム」とは、カードを用いたゲーム形式による防災教育教材のことである。遊び方は、カードの設問に対して各自がYesかNoで自分の意見を示し、多数決によって勝者を決定する。勝者はポイントとして座布団カードをもらうことができ、その数を競うというものだ。なお、少数意見も貴重であるという観点から、その意見が1人のみだった場合には、その人に「金座布団」のカードがもらえる。

### 進行上の注意

今回は「市民編」を使用します。

- 1 1設問の進行時間は5分以内で行う。
- 2 問題はユックリ、分かりやすく、2回読んで下さい。
- 3 「YES」「NO」の理由説明あたって。

要点を話しましょう。

一人の話す時間を意識しましょう。

他人の意見に反対したり、批判をしてはなりません。

「・・・ですか」と確認するのはOKです。

このように、クロスロードゲームをすることによって、災害のイメージを膨らませ、立場による考え方や行動の違いの意識付けを図ることができます。

最近、様々なクロスロードゲームが開発され、「食品安全編」、「感染症編」、「学校安全編」、中には「海上保安庁編(職務特殊)」、「新型インフルエンザ」といったものもある。





- ・ 5人19グループに分かれて実施。
  - ・ 各地域からの参加者を分散してグループ分け、白熱した議論、意見交換が行われました。
  - ・ 1人意見の場合に「金座布団」。
- 災害時にどれだけ少数意見（要援護者）に対する気遣いができるか、そのことが避難生活・仮設住宅、支援活動等における支援の工夫・改善（＝だれもが快適に）につながるでしょう！
- ・ 立場、考えが異なれば当然、答え違うのは当たり前。日常であれば冷静に判断できますが、災害時の混乱状態のときは・・・、イメージが大切ですね。

**飛び込み活動紹介 「HUG」** 情報提供者：静岡県西部防災局

避難所、運営、ゲームの頭文字から「HUG」（ハグ）意味は「抱きしめる」。避難所運営マニュアルの模擬体験、ゲーム感覚でだれもが楽しめる訓練を目指す。避難所となる小中学校を舞台（学校の施設・敷地を有効活用）に、数多くの避難者を適切に配置する。また、市民・自主防災会・学校関係者・市職員が参加すると現実的な訓練につながる。進行役1名、プレイヤー3～4名。避難者の情報が記載されたカードを次々と読み上げ、生活するスペースに見立てた図面の中に、カードを配置していきます。（3㎡/人を仮定）カードには被災者が抱える様々な事情があり、そのことに応じた処理や適切な場所に並べます。ゲーム終了後、配置、課題の処理、対処方法について参加者で話し合い、より良い避難所運営のあり方を検討します。

**飛び込み活動紹介 「アレルギーについて」**

情報提供者：浜松アレルギーの会 澤柳京子

名称が「浜松アトピーの会」から変更。地震・水害の時、当事者から発信するために手段として「緊急時（災害時）のお願いカード」を作成したので、災害Vの方にも理解と周知をお願いする。行政又はボランティアが善意で用意していただいても、日常使っているアレルギー用食材でないと、親は信用して利用することはできない。

20 年 月 日 現在	生年月日 年 月 日	私は 食物アレルギー	私は 卵・乳・小麦・そば・落花生
<b>緊急時(災害時)のおねがい</b>	性別 男・女	無事 アトピー治療中	キウイフルーツ・りんご・オレンジ
私はアレルギーを持っています。私が受けている薬には、お薬单を添えて、病院へ大急ぎ運んでください。	住所	その他 ですか。	もも・さび・いも・かにかい・くる
<b>すぐに読んでください。</b>	電話番号	症状は 喘息 じんましん	あわび・さけ・さば・牛肉・鶏肉
氏名	保護者氏名	症状 下痢 呼吸困難	豚肉・くるみ・大豆・まつたけ
職業	保護者氏名	症状 が出ます。	やまいも・ゼラチン
アレルギー	アレルギー	私は、アナフィラキシーショックを経験したことがあります。	にアレルギーを認めます。

（ 通称：イエローカード）

参 加 者 内 訳	県外	豊橋市：17人	豊川市：4人	名古屋市：5人	飯田市：7人
		レスキューストックヤード（名古屋市）：1人			
	浜松市外	湖西市：17人	静岡県V協会：1人	静岡県西部地域防災局：1人	
	浜松市内	28人	浜松市役所：1人		
	運営スタッフ	18人	湖西市災害ボランティア0そんがい：1人	災ポコはままつ：1人	
		北区災害ボランティアコーディネーター連絡会：1人	Qぼらちくおんき：1人		
		浜松まちづくりセンター：1人	都市防災研究所：1人	浜松市社協：12人	

**事務局からのつぶやき**

大変多くの団体・個人の皆様にご参加を頂きましたことは、各団体の皆様の日頃のきめ細やかな活動の成果だと心から感謝しております。豊橋に始まり、飯田、浜松の順番で、会場を一巡する形になりましたが、これからもほんとの意味で“つながっているネットワーク”をこれからもお互いに創りあって行くことが、平常時にできることだと改めて感じました。

そして、地域は離れているけれども、こんなにも“熱き思い”の仲間がいるということも確認でき、また明日から頑張れる活力にもなりました。

# 促進

「Is Group」の略  
で、商工会議所青年部の  
意。

調印式で浜松商議所  
青年部の松坂会長は  
「これまでの長い交流  
の歴史を踏まえ、新しい  
一步を踏み出してさら  
に発展させたい」と抱  
負を語った。

未を繰らした活動が報告  
された。

「わが子の安否を確か  
めに行きたいが、途中生  
き離れになった人を発見  
したなど、阪神・淡路  
大震災で実際に起きた状  
況についてどう判断する  
かを話し合うゲームも行  
った。災害ボランティア  
コーディネーターの関崎  
愛子さん(浜松市)は「災  
害時に助け合えるよう、  
県外の人たちと顔が見え  
る関係を築いていきた  
い」と話した。

## 大規模災害でも 広域連携図る

中区

### 三遠通信ボランティア100人交流

東海地震などの大規模  
災害に備え、広域連携を  
図る「三遠通信災害ボラ  
ンティア交流学習会」(浜  
松市社会福祉協議会主  
催)が五日、浜松市中区  
の浜松まちづくりセンタ  
ーで開かれた。同市や湖  
西市、豊橋市などで活動  
するボランティア約百人  
が集まった。

う、ゲーム形式の防災訓  
練を取り入れる、など工



学習会

## かに で対応確認

浜松市の遠州灘海岸で西  
一五、庄内半農などの  
浜翁編周辺で一二日と  
される。

災害時の状況判断について意見交換する参加者  
―浜松市中区の浜松まちづくりセンター―

の形に浜生し、  
の形に浜生し、  
の形に浜生し、  
の形に浜生し、



### 5 三連南信の団体 中区で交流学習会

## 地域越えて地震に備え

浜松市と愛知県豊橋市、長野県飯田市周辺の防災を考える「三連南信災害ボランティア交流学習会」が五日、浜松市中区の浜松まちづくりセンターで開かれた。約百人が集まり、想定される東海・東南海地震への備えを考えた。

三地域の持ち回りで昨年五月から開き、浜松で一巡。浜松の災害クロスロードゲームを通して意見交換する参加者。浜松市中区で

ボランティアコーディネーター団体「災ボコはままつ」など各地の五団体が日ごろの取り組みを紹介した。

先月の岩手・宮城内陸地震の後、宮城県栗原市の避難所を訪れたNPO法人レスキューストックヤード(名古屋市)の栗田暢之代表が現地の様子を紹介。「行政は県、市の枠組みに縛られ、特に十町村合併でできた栗原市は情報伝達に支障が出ている。養殖のイワナをどうするかなど、避難住民の声がなかなか届かない」と指摘した上で「三連南信のよつな、地域の枠組みを越えた取り組みは重

要だ」と期待感を示した。

カードゲーム方式で被災時などの行動を考える「クロスロードゲーム」の実践もあり、「学校に子どもを迎えに行く途中で生き埋め現場に遭遇。救助すべきか」「避難所で風邪が流行。半壊の自宅で生活すべきか」などの質問に「Y(はい)」「N(いいえ)」のカードで答え、それぞれ理由について意見交換した。(西山和宏)

## 津波に備え

県と浜松市、

津波対策推進旬間で(二十日)に合わせ

策